

『全女性教師アンケート報告書』に関する一考察

―ジェンダー・ステレオタイプにあてはまる教師像―

(日蓮宗現代宗教研究所研究員)

宇 都 宮 恵 禎

はじめに

二十一世紀は女性の時代といわれて久しい。しかし、本宗の女性教師の目覚ましい活躍をあまりみることはない。また、地道にどのような活動をしているのかを知ることもし少ない。私は男性教師から、「女性の信行道場というのはあるのですか」「いつ、どこで行われているのですか」「女性だけで三十五日間を過ごすのですか」といった質問をうけることが多い。残念ながら、女性教師の存在はこちらが考えているより知られていないのが実状である。

この状況を打破すべく、男性教師にはその存在を認識し理解を求め、女性教師にもお互いの活動支援と連携を求め、日蓮宗現代宗教研究所女性教師プロジェクトチームが平成十四年に発足し、『全女性教師アンケート報告書』が全教師に配布される経緯に至った。

しかし、どうであろうか。この報告書にどれだけ教師が関心を示し、目を通してくれるであろうか。報告書を読めば大まかな現状は把握出来る。ただ、文上には現れない多くの事態があることも察することが出来る。そこには、既成概念にとらわれる我々の心情が大きく左右しているのではないか。この疑問を社会心理学の立場からみてみたい。

一、ジェンダー・ステレオタイプとは何か

1、ジェンダーとは何か

男女を肉体的に区別することを生物学的性とする、社会的役割で男女を区分することをジェンダーという。簡単な例でいうと、「男は仕事、女は家庭」といった性的分業のことである。

2、ステレオタイプとは何か

一九二二年にリップマンが、「集団メンバーや外界の事象などに対して持つ、単純化された信念」に用いた*1。また、一九二二年にベイソウは、「ある特定の社会的カテゴリーに属する人々についての極端な一般化」と定義づけている*2。分かり易くいうと、私たちは本やテレビから得た知識と情報により「あの人は○○だ」「あの国は○○だ」と思い込んでしまうことである。

3、ジェンダー・ステレオタイプとは何か

一九九〇年、リップマンは「男性と女性に対して人々が共有する、構造化された思い込み」といつている。

「行動力もあり頭もよくリーダーにふさわしい」

「やさしく感受性があり、控えめである」

もし、私たちがこの二つの特徴的な性格をきいた時に、前者を男性、後者を女性と判断しがちなところがある。「このように、ステレオタイプは性格特性や能力、身体的特性、行動様式、役割分担、価値観など、人となり（パーソナリティ）のあらゆる側面について存在する。また、何の 카테고리に属する人たちへの思い込みかによって、たとえば世代、職業、性別、出身地、人種、宗教などに関するステレオタイプがある」*3。

経験より、一例をあげることとする。剃髪の女性教師が道服に折五条を掛け、町を歩き、電車に乗るとする。僧侶という珍しさもあり、目立つものである。その次に人は、男か女かで見分けようとする。ここで男と判断する人は、僧侶という職業は男性固有のものと思いついでいるのである。もし、女と判断した人であっても、「珍しい。なぜ、僧侶になったのか」と疑問を持つことが多い。これも、僧侶は男性の職業と決めているのである。子供はもつとストリートである。指をさして、「あの人は男？女？」と親に聞いている場面に何度か出会ったことがある。幼少の頃から、性別を無意識の内に判断しようとしているのである。

4、その他のジェンダー・ステレオタイプを紹介

ここで、幾つか参考までに挙げてみたい。必ず、自分に思い当たる型があるはずである。

・「サンプリング・エラー」*4

たまたま自分が見聞きした事例により「正しいと信じて」把握してしまうこと。例えば、法要式における本鉢は、経験等からいって男性教師のほうが出来る割合が高い。女性教師が本鉢を回している光景を見たことがない、という

人も多いと思う。そうすると、女性教師は本鉞を回すことが出来ないと思ひ込んでしまう可能性がある。

・「誤った関連付け」(illusory correlation) * 5

前記のサンプリング・エラーで目立った事例が、ステレオ・タイプとして形成されることである。集団において、数少ないものは目立つものである。例えば、いつも話し声が小さく聴き辛い女性が集団に一人いるとする。「女性」と「小さい声」が結びつき、女性は一般に声が小さいというステレオタイプを作ってしまうのである。

・「サブタイプ化」―例外とみなす* 6

「ジェンダー・ステレオタイプが他のステレオタイプと異なっている点として、ステレオタイプを維持しやすくするサブタイプ化が生じることを指摘した。人は、たとえステレオタイプに合わない事実があっても、ステレオタイプの内容を修正せず、例外的なケースとみなすそして、それらの例外を入れるためのサブ・カテゴリー(サブタイプ)を作るので、もとのカテゴリーについてのステレオタイプは維持される。これがサブタイプ化である」* 7。例えば、女性教師の数はまだまだ少数である。そのため、女性教師の行動は女性のステレオタイプに合わないこともある。そこで、女性というカテゴリーの下に、女性教師というサブタイプを作る。それによって、自分が持つジェンダー・ステレオタイプは維持され、合わないケースは例外として片付けてしまう。

ここで問題なのは、このサブタイプ化が壊れにくいという点である。身近で個人的な人間関係から生まれるということから、夫婦間を例に取り上げてみる。夫は、活動的な妻を日頃目の当たりになっているが、自分のジェンダー・ステレオタイプと合わない部分を見つけている。物静かで従順な女性をジェンダー・ステレオタイプにもつ夫は、行動力のあるたくましい妻がいても例外として、「自分の妻」ということでサブタイプ化に入れてしまうのである。よつて、夫のジェンダー・ステレオタイプは修正されることなく、例外として片付けてしまうのである。

5、寺庭におけるジェンダー・ステレオタイプ

身近な寺庭生活において性的分業を当てはめてみると、

男性教師：法要、布教活動、会合等——「作動性」

寺庭婦人：寺族の世話、檀信徒との対応等——「共同性」

「作動性」と「共同性」は、ベイカンが一九六六年に提起した、基本的な生命のあり方を示した概念である。

女性を取り巻く社会環境は、ずいぶん変化してきた。日本の内閣府が提出した『男女共同参画』をみても、男女の役割分担は変化しつつあるが、実はこのジェンダー・ステレオタイプはこの二十年でも変化は小さいという。その裏づけとして、男女の性格特性を表す形容詞項目を再検討する上で、二十年近く前に作成された項目が現在でも妥当であることが明らかになったのである。

例をあげるとすると、*6

- ・ 男性：冒険好き、独裁的な、粗雑な、等
- ・ 女性：感動しやすい、魅力的な、恐がりの、等

6、女性教師という立場

それでは、前記の概念で女性教師の役割を定義付けてみる。様々な立場が想定されるが忠実に実践したら、法務等をこなし、家事全版をも引き受けるという「作動性」「共同性」どちらの部分も含むことになるのである。住職・担任・教導という立場になり、家庭も守っていくとなると精神力も体力も必要とするパワフルな女性が今以上に増えていくことが期待される。女性教師を取り巻く環境が個人によって違うので様々なケースが考えられるが、リスクも多くなることは避けられない。寺庭と家庭、どちらも両立することは困難である。独りで寺院を守っていく責任も、重大である。また、住職をサポートするつもりで教師資格を取ったのであるが、男性教師と肩を並べてやりたいと意気込む人もいるであろう。その時に、受け入れてくれるか否かで立場に大きな違いが出てくる。『報告書』には出ていなかったが、住職が夫であるケースも多いと考えられる。その中で、教師という立場が同じだからこそやりにくいといった声を聞くことがある。

『報告書』の「女性教師への格差の現状」の統計で、「ない」と答えた人が約半数いたことは意外であった。自分の立場をわきまえているのか、肩書きだけになってしまっているのかは分からない。現時点でのジェンダー・ステレオタイプでは、何か行動しようとしたら、大なり小なり必ずその壁にぶつかることは避けられない。

二、『全女性教師アンケート報告書』を読んで

疑問その1「布教活動したいが・・・」

女性教師の年齢別では、五十歳から七十歳代が70%を占めている。僧侶としてのスタートが遅いという指摘もあるが、僧侶を志した理由も様々で、人生経験も豊富なはずである。しかし、人生のドラマがあつたわりには、寺務に携わることは多くても、現実に布教活動を実践している人の割合は低い点が見られる。

ここで、報告書にみられる統計を参考にしていきたい。

信行道場入場の動機として、回答者三八七人中、

・住職の手助け、寺の後継という、「寺院を守る」という理由の人が一六九人を占める。
他の動機として目立つものとして、

・自行のためが九十八人、布教のためが六十一人とある。

将来活動してみたいことでは、回答者一四二人中、

・社会活動（相談、福祉、介護等）が六十二人

布教活動が三十八人

と半数以上を占め、

・自行をしたい、が十七人と、激減である。

信行道場入場時と出場後では、どこでスイッチが入ったか確かではないが、「活躍する」ということに重きを置きたい傾向がみられる。入場中にどのような影響と心の変化があつたかは『報告書』にはないので判断しかねるが、教師資格を取つたということ、自信を持ち、自分の環境を生かし働きたい意欲と責任を自覚したのかもしれない。

そして、「活躍する女性教師」という像に多大な影響を受けたのかもしれない。そのわりに、先にみたように活動に乏しい現状である。

ここで問われることは、「布教活動」とは何をもってそれとするかということである。人々に法を説くということは大前提ではあるが、社会活動も、寺院における仕事を一つ取ってみても、布教活動の一環ではなかろうか。教師資格を取り、経験も浅い自分が様々な女性教師と語る中で感じたことは、「外に出て活動をする」とを「活躍」とする雰囲気があるということである。一般社会において女性の社会進出がめざましいことにも、影響があるとみえる。そこで、信行道場入場の動機として最も多かった、寺を守る「守り」の部分はどこへ行ってしまったのか。この部分が希薄に感じる。そして、「布教の場」は与えてもらうものなのであろうか。

・同性のサブタイプ化

これは持論であるが、ジェンダー間だけでなく同性間におけるサブタイプ化があることを提示したい。活躍する女性教師Aに対し、なかなか活躍の場を得られない女性教師Bは、「Aさんは環境が整っている」等、様々な理由をつけてAさんの活躍を例外とみなそうとする。これは同性間の対立を深めてしまう。寺庭をきちんと守る、という基盤の乱れにつながりかねない。

・防衛帰属*7

A女性教師がステレオタイプによつて差別を受けていることを、B女性教師が目撃する。ジェンダー・ステレオタイプが原因なのであるが、B女性教師は、「A女性教師はあんなふうだから駄目なのだ」と考えてしまう。同性ということでは変わりはないのだが、A女性教師の能力に帰属してしまう傾向がある。自分は大丈夫、と自己防衛をして

しまうのである。

二例をとつても、同性間のステレオタイプが社会におけるジェンダー・ステレオタイプを維持させてしまう結果を生んでいることがわかる。

疑問その2 「何もしていないが・・・」

『報告書』の「女性教師で活躍していない人」が全体の約9・9%いた。高齢ということを理由としていたが、「女性のための修法道場があれば入場したい」とあった。高齢ということで研修等を断念している人が多い中で、最も体に負担を掛ける修法を選ぶことは如何と思われる。

・「初期値」のいたずら*8

いったん作られたジェンダー・ステレオタイプは、新しい情報に接してそれを理解するための初期値のような働きをする。子供が初めてコンピュータに触る時、何の情報も与えていないのだが、女子は不向きであると自分で思い込んでしまっていることがある。そして、コンピュータに対する初期値となってしまう。もちろん、自発的にステレオタイプを維持してしまう結果となる。女性教師の中にもこの初期値により、食わず嫌いになっている人がいるのではなからうか。

若い頃から経験を積んできた男性教師と共に高齢の女性教師が研修を行うのは、体力的に困難なのはわかる。しかし、それこそ様々な年齢層が共に研修する中で、お互いに助け合うことにも大きな意義があるのでなからうか。ま

た、若い世代は高齢の人に、経験豊富な人は浅い人に力を貸し、向上するのが当たり前ではなからうか。

おわりに

今回の『全女性教師アンケート報告書』は、問題点を重視したことを読み取ることが出来る。その中でわざわざ社会心理学を取り入れたのは、第三者の見方をしたかったからである。これからは、ジェンダーという言葉がもつと目につくかもしれない。その反面、ジェンダーフリーを危ぶむ声も立ち上がってくる。

今回の『報告書』で感じたことは、女性の甘えと依存が見え隠れしているということである。私たち女性教師は、勇気と責任を持って一步を自分で踏み出さねばならない。『報告書』に「尼僧としての立場で……」「男性教師とは同様な立場でなく、尼僧ならではの活動をしながら……」とある。社会に働きかけることも、寺庭をしつかり守ることも、どちらも非常に尊い。「誰かがやっているから私も……」ではなく、自分の立場と適性を取り違えないよう行動することも責任であると考え。多くの女性教師が何かしようと思うとき、自分の性に返るはずである。その時、どれだけの人が自分の性に感謝出来るであろうか。女性として生を授かったことに恩を感じることが出来たら、差別という言葉は使わなくなるのかもしれない。

*1~8 『ジェンダーの心理学』 青野篤子、森永康子、土肥伊都子 ミネルバ書房

参考文献

- 『心理学とジェンダー』 柏木恵子、高橋恵子 有斐閣
『発達心理学とフェミニズム』 柏木恵子、高橋恵子 ミネルバ書房
『甘えの構造』 土居健郎 弘文堂
『日本の思想』 丸山真男 岩波新書